

---

# 二十七歳の誕生日。

海田 陽介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一十七歳の誕生日。

### 【ZPDF】

Z5900D

### 【作者名】

海田 陽介

### 【あらすじ】

とある女性の、一十七歳の誕生日を描いた短い、日記のような小説です。

田を覚まして、ああ、明日は誕生日なんだ、と、彼女はふと思つた。

今年で一十七歳になる。

一十七歳ところのまへりとした年齢だ。おばさんとこゝほどの年齢ではないけれど、でも、わざわざこゝの感じじゅうな、と、ほんやうりと彼女は思つ。

できることなら歳なんてとりたくない。自分がどんどん古くなつていいくみたいで嫌だと彼女は感じる。

だけど、それは避けようのないことだ。誰だつて歳をとるし、それが嫌なら死ぬしかないのだから。でも、今のところ彼女はまだ死にたいとは思わない。

・・ただ、ほんのちよつと哀しげ氣がするだけだった。

せめて、今年もあるひどがとなりにいてくれたら、歳を取ることもそんなに苦痛じゃなかつたかもしれない、と、彼女は考へる。くだらない感傷かもしけないけれど、彼女はそんなふうに思わずにはいられなかつた。

彼女は別れた男のことを少し、思い出した。

その男とは約四年半付き合つた。

結婚するつもりだった。実際にそんな話もしていた。

だけど、些細なことが切つ掛けで喧嘩になつて、別れることになつてしまつた。

それまでもよく喧嘩はしていたけれど、でも、今回の場合は、もう、元には戻らなかつた。

だけど、そんな話はどこにでも転がつてゐるし、少しも特別なことじゃない。わたしはたぶん、ちょっと大きさに悲しがつてゐるだけだ。

しつかりしなさいよ、と、彼女は自分自身を叱咤する。わたしよりももつともつと辛い思いや、哀しい思いをしてるひとはたくさんいるのだから。何をこれくらいのことでメソメソしてるんだわ。バカみたいだ。・・・ほんとにバカみたいだ。

でも、いくらそう言い聞かせて、少しも心は軽くならなかつた。彼女は重たい心をひきずるようにして、無理にベッドから身体を起こした。

これから仕事に出かけなくてはならない。

彼女は大学を卒業してから植栽関係の会社で働いている。

仕事は楽しいような、楽しくないような、曖昧な感じだ。特別大きな不満はないけれど、でも、今の仕事をずっと続けていきたいといような気持ちにもなれない。とりあえず今はいいとしても、これから先どうするんだら、と、ときどきそんなふうに考へることもある。

だけど、その疑問に対しても、はつきりとした答えを出すことではない。出せないから、ちょっともやもやとした気持ちになつたりもする。

部屋のカーテン開けると、明るい太陽の光が、彼女が一人暮らしをしている狭い部屋のなかに溢れた。

浴室で顔を荒い、歯を磨く。それから簡単な朝食を作つて食べる。トースト一枚と紅茶。

服を着替えて、化粧をして、駅までの距離を少し歩く。そしてすし詰めの電車に三十分程揺られて会社にたどり着く。・・いつもどおりの毎日が過ぎていいく。

仕事を終えて彼女が家にたどり着いたのは、もう十時近くだった。今日はちょっと仕事が長引いて残業しなければならなかつた。最近は毎日のように残業している気がする・・。

とりあえずとこつ感じでシャワー浴びる。シャワー浴びたあとに遅い夕食を取る。これから料理をする気にはとてもなれないのだが、夕食は帰りがけに買つてきたコンビニ弁当だ。

テレビをつけ、それを見るともなくみながら弁当を口に運ぶ。弁当ははつきりといって、もう食べ飽きてしまつたせいか、あまり美味しい。ほんとうは食べたくないのだけれど、でも何も食べないわけにはいかないから、無理に食べている感じだ。

テレビ番組は退屈で、そのうち彼女はうんざりした気持ちになつてテレビを消した。テレビを消すと、とたん部屋のなかはひつそり

として静まり返つて、彼女は息のつまるような孤独を感じた。

何か音楽をかけてもいいのだけれど、何も聞きたいと思つて曲が思い浮かばない。

彼女は諦めてまたテレビを点けた。テレビでは恋愛をテーマにしたバラエティ番組がやっていた。テレビに映つてゐる俳優が、どことなく、昔好きだった男に似てゐるような気がする・・・。

何となく部屋の空気が淀んでいるような気がして、彼女は部屋の窓を開けた。窓を開けると、夜の涼しい風が静かに吹き込んできた。

微かに、夏の匂いがした。

風と一緒に、アパートの外の、様々な音が部屋のなかに流れ込んでくる。

車の走りすぎる音、電車の音、近くにある公園の木々が風にそよぐ音、虫の鳴き声・・・。

風に吹かれながらそれらの音に耳を傾けていくと、それまで沈み込んでいた心が、少しだけ、穏やかになつていくのを彼女は感じた。

彼女はふと思いついて冷蔵庫の前まで歩いていき、その冷蔵庫のなかから缶チューハイを一本取り出した。そしてそれを持ってまた部屋の窓の前まで歩いていくと、窓の外に見える街の光をぼんやりと見つめながら缶チューハイを飲んだ。

気がつくと、いつの間にか部屋の時計の針は十一時五十五分を指していた。

もうあとほんの少しで二十七歳になつてしまふんだ、と、彼女は無感動に思った。

そして、彼女はふと思い出した。別れた男が毎年、誕生日、二時きつかりに電話をくれたことを。

やがて時計の針は十二時ちょうどを指した。もしかしたら、と、彼女は期待したが、しかし、電話はならなかつた。

ケータイ電話を見つめる彼女の顔に、それとわからないほどの微かさで、悲しみが広がつていぐ。彼女は軽く瞳を閉じ、何かが通り過ぎていくのを待つように少しの間そのまままでいた。

そして、少し経つてからゆつくりと閉じていた瞼を開いた。

それから程なくして彼女のケータイ電話が鳴つた。それは友人からの電話だつた。彼女は五秒間程、ケータイのディスプレイに表示された友人の名前を見つめていて、やがて電話にでると、すぐに笑顔で話し始めた。

「ハッピーバースデー。」と、友人が彼女のためにお祝いの言葉を述べる。

「ありがとう。」と、彼女は笑つて答える。

アパートの窓から風が入り込み、彼女の耳元をそつと吹きすぎていく。彼女は耳元を吹きすぎていぐ風の音を感じながら、これから訪れる夏を想う。そしてもう過ぎ去つてしまつたいつくもの中の夏を思い出す。

夏の高くて青い空。照りつける熱い日差し。蝉の鳴き声。夏の濃

い緑の木々。海と線香花火、みんなの笑い声、それから・。それから・。彼女は考え続ける。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5900d/>

---

二十七歳の誕生日。

2010年10月15日17時31分発行